ケンダイ

「会津の人間は単純だから、しめなわも単純。」

（山内政文さんのことば）

山内家の「けんだい」

福島県会津若松市・山内政文さん（昭和６年生・89歳）

福島県会津若松市の山内家で代々作られてきた「けんだい」（実物展示 C_No.306・411）は、集落でも３戸のみに伝わる正月飾りです。しかし現在では山内家のみが製作を続け、「そもそもなぜ３戸だけなのか。その謎に気づくのが遅かったと思っています」と山内さん。

◉ワラは叩かず、塩をまく。

会場内にある製作風景の映像をご覧ください。冒頭、山内さんは少しやりづらそうにワラで縄を綯っています。これは、「しめなわ用のワラは叩かない」という山内家の決まりがあるからです。つまり、普段のワラ細工用は木槌などで叩いて柔らかくしますが、しめなわ用は神様のためのものなので叩かず、かたいワラのまま製作します。

また、しめなわを全て作り終えたあと、作業した場所に塩を振ります。「最後に塩を振って、ワラを踏んだりしたことを帳消しにするんだ」。ワラの扱いにもハレとケがあるのです。

◉山内家の正月飾りと「モチ」の智恵

「けんだい」は、ワラで作った二つの渦巻きを交差させ、ユズリハ、裏白、紙垂を付けます。これは神棚の大神宮様用ですが、山内さんはそれ以外にも長宮様用、お釜様用、稲荷様用、歳神様用、水神様用を製作します。

大神宮様用にはモチを２つ供えますが、昔は元旦の朝にさらに２つ、３日にはさらに１つ重ねたそうです。山内さんはこう言います。「百姓がお正月にモチを飾るのは、神様にあげたモチだけは（殿様が）持ってかねぇから。だから神棚にいっぱいモチをあげたんじゃねえの。おれはそう思う。百姓の知恵。」

◉稲作文化の究極の美

以下は山内さんのお手紙から抜粋。

「1955年以前、農業が機械化する前は農業用品、生活用品を冬季の雪に降り込められた中で、稲わらで作っていました。衣類以外はほとんど稲わら細工の品々で生活できました。

藁草履、草鞋、蓑、ゲンベ（雪用の短靴）、フカグツ（長靴）、荷縄（物を背負う時のロープ）、モッコ（天秤棒で物を担ぐ時の網）など一年中自給できるほどの品数、数量を作っていました。

しめかざりの優雅で美しい姿は、この必需品製作の技術あっての表現と思っています。稲作文化の究極の美がしめかざりかと思っています。

今、農村部でも自分で作って飾る人が少ないようです。忙しいだけでなく稲わらの確保がコンバインの出現で面倒くさい。また、離農、卒農で稲わらを触ることもなくなっているようです。私の集落も1955年頃は70戸ほど稲作をしていました。今は13戸のみです。しめかざりを自作しているのは２戸くらいです。」

◉三世代のハレとケ

日常の藁細工の延長線上にしめかざりの造形はある、という山内さんの言葉から、本展「第２室」（隣の会場）では、山内家の蔵に保管されていた古い時代の日常の藁細工を展示しています。

「馬のわらじ」（C_No.419）はとても古く、山内さんのおじいさんが製作した明治頃のもの。「牛のわらじ」（C_No.418）と「人のわらじ」（C_No.417）はお父さんが製作したもの。そして、今回の「けんだい」は山内さん自身が製作。つまり、「三世代のハレとケ」を藁細工で見ることができます。

「馬のわらじ」が黒いのは囲炉裏の煤が付いているからです。昔は炊事をするたびに、家中に煙が漂っていました。

◉山内さん直筆のワラ細工の解説

「伝えたい」という気持ちが溢れるメモを、送ってくださいました。

優しくけんだいを結ぶ山内さん

山内さんの製作物
・けんだい（石）
・歳神様（下左）
・お釜様（下左）
・水神様（水田り写真）
・長宮様（横長の神棚）

山内さんの蔵から出てきた日常のワラ細工。　蓑を着る山内さん

左上から時計回りに、牛のわらじ、馬のわらじ、人のわらじ

もっこ（運搬用具）

コモ（雪囲いなど用途多数）

山内さんの「けんだい」製作風景の動画を会場で流しています。